



.....

監督 パオロ&ヴィットリオ・
 タヴィアーニ／出演＝ステファ
 ニア・ロッカ／ティモシー・ピ
 ーチ（アルシネテラン配給／
 2001年イタリア・フランス・ド
 イツ合作映画／187分）

.....

トルストイ原作の古典『復活』における悲劇のヒロイン、カチューシャと理想主義者の地主ネフリュードフとの愛を21世紀が幕を開けた今、あらためて考えることは大いに価値がありそう。贖罪のため全財産を投げうち、さらにはカチューシャへ結婚を申し込んだネフリュードフの愛は本物なのだろうか……？ 青春時代に戻って議論してみてもはどうだろうか。

🎬 今なぜ古典の映画化か？

トルストイの名作『復活』は、これまでも数回映画化されたが、このパオロ&ヴィットリオ・タヴィアーニ監督の『復活』は、2001年のイタリア・フランス・ドイツ合作映画で187分という超大作だ。

トルストイは19世紀の作家（1828～1910年）。ドストエフスキーと同じく、人間の精神や魂の本質に目を向けた多くの作品を書いている。時代背景は当然19世紀のロシア。『復活』はトルストイの晩年の作品だから、映画のラストには、19世紀が終わり20世紀を迎えて民衆が新たな希望を語り、喜び合うシーンがある。カチューシャと別れたネフリュードフは、この民衆の喜びに接することによって初めて、新しい世紀を迎えたことを知るが、この新世紀への移行は、この後のネフリュードフの新たな人生の始まりを暗示している。

ここから1世紀を経て、20世紀から21世紀へ移行した今、あらためてネフリュードフとカチューシャの愛の形を考えることは、大きな意義があるだろう。そん

な位置づけで、3時間の「愛のドラマ」をお正月休みの最後の日、たつぷりと堪能した。なお、本作は2002年モスクワ国際映画祭のグランプリ受賞作だ。

トルストイという作家（文豪）の難しさ

トルストイの代表作は？ と聞かれたら、誰もが『戦争と平和』、そして『アンナ・カレーニナ』を挙げるだろう。『復活』は3番目の代表作だし、今時の若い人は「世界文学大全集」を読んでいないから、読破した人は少ないだろう。

また『戦争と平和』にしても、えらく難しい物語。オードリー・ヘップバーン等の出演で映画化された（56年）が、これは比較的わかりやすかった。私がかれを始めて観たのは中学生の頃だが、①オードリー・ヘップバーン扮する恋に破れたナターシャが言う「all is over」という名セリフと、②ナポレオンがモスクワを占領してやっと戦争に勝ったのに、「なぜロシアの降伏の使者が来ないのか」とイライラ歩き回っているシーンを今でもよく覚えている。

しかしロシア版『戦争と平和』全4作（65～67年）になると、すごく難しい。特に2人の男性主人公であるアンドレイとピエールが、人生について、また人間について長々と語り合うシーンなどは、いかにもトルストイ文学の神髄を忠実に映画化しているなど感心するものの、とにかく難解そのものだ。それに比べると、この『復活』は、それほど難解な映画ではない。

またロシア文学の難解さは、ドストエフスキーになるともっとすごい。最も有名な作品は『罪と罰』だが、これはわかりやすく面白いテーマの物語。しかし晩年の代表作『カラマーゾフの兄弟』になると、その「哲学談義」は難解そのもの。また人間の「内面」を描いているうちに、どんどん暗くなっていった作品が『地下生活者の手記』という小品。私はこれらの世界の文学を大学1回生の時に最もたくさん読んだ（読破した）が、ロシア文学の特徴は第1に長さ、第2に難解さだと思っている。もっともこれは、決して面白くないという意味ではなく、じっくり読んでいけば惹きつけられていくことはまちがいない。

『復活』の基本ストーリーの押さえ方

『復活』の基本テーマは、大地主のネフリュードフ公爵と可憐な娘カチューシ

ヤとの愛。そしてこの2人の愛は本当にドラマティックに大展開していくが、一応その基本ストーリーだけ紹介しておこう。

カチューシャはお屋敷に拾われた召使だが、ネフリュードフはそんな彼女に興味をもち、ある日遂に男女の仲に……。これを愛だと信じるカチューシャに対し、旅立つネフリュードフは翌朝100ルーブルのお金を渡した。絶望したカチューシャはそこから転落の途に……。ある日、陪審員として殺人罪の女囚を裁く法廷に出たネフリュードフは、被告人席にいるのがカチューシャであることを知り愕然とする。彼女は無罪を主張。そして評議では無罪となるはずだったが、ミスがミスと呼び、懲役7年の有罪に。カチューシャの「墮落」は自分の責任だと感じたネフリュードフは、裁判やり直しのために全財産を売り払って献身的な努力をする。その上ある日、遂に「僕と結婚してくれ」と結婚の申込みまでも……。ネフリュードフの善意を信じながらも、彼の結婚申込みは愛情ではなく、自己の罪を償うためだと理解したカチューシャは、シベリアへの流刑の旅の中で知り合った政治犯シモンソン（ジュリオ・スカルパーティ）と結婚する。これは、ネフリュードフを解放するために、彼を愛しているカチューシャがとりうる最善の途だったのだ。そして時代は20世紀を迎え、ネフリュードフとカチューシャはそれぞれが新しい歩みをはじめていく……。

ロシアの陪審制度「小考」

この映画は、これから裁判を受けるカチューシャが収容されている女子雑居房の中のシーンからスタートする。一羽の蝶を見つけこれを捕まえようと必死になる多くの女囚たちと、これに見向きもせず、1人煙草をふかすカチューシャ。いかにも自分の人生を諦めてしまったかのように変わり果てたカチューシャの姿だ。カチューシャが今裁かれている罪は、売春婦の時に犯したとされる、客からの現金の窃盗とその客殺し（毒殺）の罪だ。カチューシャとともに裁かれているのは、売春宿の案内係の老夫婦。

客はカチューシャに「俺のトランクから50ルーブルもってこい」と命じ、カチューシャにトランクの鍵を渡した。疲れ果てた身体で、また朦朧とした意識の中、カチューシャはトランクの鍵をあけ、大金の入った財布の中から50ルーブル

だけを抜き取り、これを客に渡した。ところがこの一部始終を見ていた案内係の老夫婦は、ヘアピンを使ってトランクの鍵をあけて財布を窃取。そして「疲れた客を少し眠らせたなら……」とカチューシャをそそのかしたため、カチューシャは眠り薬と言われた毒薬を水に溶かし、これを客に飲ませた……。

これが「真相」なのだが、もちろん老夫婦は大げさな芝居を交えながらこれを否認。他方カチューシャは……。どうも法廷での態度が悪い。そのふてぶてしい態度はどこからどう見ても、金のためなら何でもやりそうな売春婦そのもの。その上、裁判長にも「宿での仕事は何か……」と聞かれると、「裁判長もよくご存知でしょう……？」と妖しげな流し目……。これでは無罪の事件も怪しくなっていくのも道理。その上、陪審員として、かつての清純な姿から変身してしまったこの驚くべきカチューシャを見たネフリュードフは、カチューシャが墮落した身の過程の説明の中で自分のことが出てこないかと気がかり……。

現在の英米法を基礎とした刑事訴訟法に基づく刑事法廷の姿からみれば、この裁判における裁判長の訴訟指揮はかなり変だが、陪審員の評議のやり方やその内容は結構まともなもの。ところが、何と評決の結果は「窃盗は無罪だが、毒殺は有罪」と出た。実はこれはちょっとした手違いによるもの。そして裁判長もこの評決はおかしいとすぐに理解したし、陪審員の評決を無効にできる手続もわかっていたのだが……。

評決は老夫婦も有罪、そしてカチューシャも有罪というもの。もっともカチューシャの有罪はおかしいことがわかっているため、最大限情状を考慮して、懲役7年という「軽い刑」となった。

このカチューシャの罪を裁く法廷シーンは、アメリカの陪審制度や日本でこれから施行されようとしている裁判員制度と対比しながらみれば、より一層興味深いものと思われる。

カチューシャが日本で有名なワケ

日本でも有名な演劇は多い。たとえば森光子の「十八番」は林芙美子原作の『放浪記』だし、杉村春子の「十八番」は、テネシー・ウィリアムズ原作の『欲望という名の電車』だ。しかしこれは演劇ファンには有名でも、意外と国民的に

は広く浸透していない。ところがトルストイの『復活』そのものを読んでなくても、日本では多くの人々が悲劇のヒロイン「カチューシャ」の名前をよく知っている。これは、今の若者は知らないだろうが、大正3年に島村抱月が『復活』を戯曲化して芸術座で上演し人気を博したためだ。とりわけその劇中で松井須磨子が歌った「カチューシャ可愛いや～別れのつらさ～」という有名な歌詞の『カチューシャの唄』が大ヒットしたためだ。

哲学を論じ、人生を語るには演劇は最高の舞台。特にトルストイやドストエフスキーはいわゆる「前衛」芸術の十八番だが、難解なものが多い。その中での『カチューシャの唄』の国民的大ヒットは極めて異例のものだ。

ネフリュードフの愛は本物か

『復活』の時代背景を見れば、そこにはトルストイが問題視している多くの社会矛盾があることがよくわかる。その最大の問題は封建地主制。ネフリュードフ公爵はトルストイの分身ともいえる理想主義者だから、「土地を地主が独占することは正しくない」という思想の下にこれを小作人に分配しようとするが、所詮それは「机上の空論」。トルストイが考えるようなそんな甘っちょろい問題ではなかったのだ。ロシアにおいては、この問題の「解決」のためにはレーニンたちによる「ロシア革命」につき進むことになる。その他にも封建ロシアの身分制度、エセ宗教、偏った裁判制度、苛酷なシベリア流刑など19世紀のロシア社会をとりまく問題点はあまりにも多い。しかしトルストイは、この『復活』の中では、そのような社会問題の数々はあくまで背景事情としてのみ描き、小説のテーマをカチューシャとネフリュードフとの愛に絞っている。

そこで最大の論点は、第1はネフリュードフのカチューシャへの愛は本物かということであり、第2はカチューシャはなぜネフリュードフと結婚せず、政治犯シモンソンと結婚したのか、つまりカチューシャはネフリュードフを愛していなかったのか、ということだ。この映画を観た人たちは、青春時代に戻り、この議論で花を咲かせてもらいたいものだ。そうすれば21世紀がはじまった今、あらためてこの映画をつくった監督や俳優たちもきっと喜んでくれるだろう。

2004(平成16)年1月5日記